

# 白居易における幽独の詩情

平野 顕 照

一

多いのに気づくのである。表は『全唐詩』から抽出した「幽独」使用数を示したものである。

張九齡	2	賀朝	1	孟浩然	1	李嘉祐	1	韓愈	1	元稹	1	邵謁	1	李建勲	1
宋之問	1	王維	1	李白	2	杜甫	6	柳宗元	1	白居易	13	司空圖	1	鄭谷	1
陳子昂	2	王昌齡	1	韋應物	4	閻防	1	呂溫	1	李德裕	2	方干	1	陸龜蒙	1
張說	1	劉長卿	3	岑參	1	秦系	1	孟郊	1	僊嗣宗	1	韓偓	2		

1 (平野)

文学は人生を語る、といわれる。人生はほんらい波瀾起伏の多いものであって、順調に運ぶ場合と、そうでない場合との絡みあいのうちになりたっている。人間はえてして順調な人生を歩む場合よりも、その裏返しの状態に遭遇した時、受ける心の痛手を、不幸、懷疑、絶望、孤独などさまざまな感じかたをする。とりわけ極力虚構の文学創造の道をとらない中国文学において、たとえば人間が孤独を感じた時、言語に託してその心情を色々と表現するが、中期に輩出した詩人白居易は、往々に「幽独」の言語をかりて自己の文学に反映しているのを見る。しかもその現象が、左の表に認められる如く、他の詩人に比較してわりあいに

本稿では白居易において使用度の多い「幽独」に託する詩情が、かれの文学のなかで、どのように作用し、展開し、

効果をあげているのか、ということを吟味しようとする。

## 二

中国文学史上、「幽独」の語が見える濫觴となる作品は、屈原(前三四三?—前二八三?)の「九章」涉江である。その中で朱熹『楚辭集注』巻四)が分章した次の一章に見られる。

哀吾生之無樂兮

吾が生の楽しみ無きを哀しみ

幽独処乎山中

幽独にして山中に処る

吾不能変心以従俗兮

吾は心を変じて以て俗に従う

固將愁苦而終窮

固に將に愁苦して終に窮らんとす

後漢の王逸(八九—一五八?)は、「幽独処乎山中」の句について、「遠く親戚を離れて、逐わるるを斥くなり」との注釈を施している(『楚辭章句』巻四)。のち唐の李善や五臣(『文選』巻三三)も、朱熹もすべて王逸の見解を継承しているとみられる。試みにわが国の翻訳で見ると、藤野岩友氏は、「私は独り山中に身を置いている。」(『楚辭』集英社版漢詩大系)といい、花房英樹氏は、「身内から遠く離れて、

独りわびしく、この山の中に身を置いている。」(『文選』集英社版全釈漢文大系)とのべている。いずれも「幽独」の語を共通して孤独な状態において解釈している。但しこの「幽独」が山中に於て成立しているわけで、山中とはもちろん世俗と絶縁した場所であって、孤独を保つのに適しているとの認識に立脚してのことである。いわば山岳を地盤として「幽独」がまっとうできるという思慮がはたらいっている。少なくとも世俗と調和して生活を営むわけにいかないので、山中にただ一人ずまいしようと、屈原自から決断したのである。つまり屈原の正義感が屈原に山中への隠遁を撰択させたこと明らかである。したがって隠遁思想の系譜上に位置することばとして、「幽独」があるといつてよいであろう。かような意義をもって中国文学史上にまず「幽独」の語が出現したのである。

そののち例えば『文選』によると、その巻一五に後漢の張衡(七八—一三九)の「思玄賦」があつて、「余が榮を奮えども見るもの莫く、余が香を播けども聞ぐもの莫し。幽独にして此の仄陋を守る。敢て怠遑して勤を舍てんや。」の句が見られる。またその巻二に宋の謝靈運(三八五—四三三)の「晚出西射堂」詩があつて、「安排は徒らに空言のみ、幽独なれば鳴琴に頼るのみ」の一聯に見られる。李

善はいずれも『楚辞』を引用して注釈を施している。『楚辞』中で確認した意味で張衡も謝靈運も活用しているとの見解である。たしかに張衡は後漢の和帝に、謝靈運は宋の劉裕にとそれぞれ疎外されたことにもとづいている点で、屈原の身上に相似している。

かかる「幽独」の語は、少なくとも唐時代を迎えるまで、詩篇の中にあまり頻用されることがなかったようである。

唐代に入ると俄然使用度を増してくるのである。なかでも白居易にはなお多いのが目だつ。いまかれの用いる「幽独」に託された詩情の機微を吟味してみようと思う。

## 三

まず「微之を憶い、仲遠を傷む——憶微之傷仲遠李三仲遠去年春喪」詩を読む。

幽独辞羣久  
漂流去国賒  
只将琴作伴  
唯以酒為家  
感逝因看水  
傷離為見花

幽独にして羣を辞すること久しく  
漂流して国を去ること賒<sup>はる</sup>かなり  
只だ琴を<sup>もつ</sup>て伴となすのみ  
唯だ酒を以て家と為すのみ  
逝くを感じ因りて水を見  
離れ<sup>わか</sup>れを傷み為に花を見る

李三埋地底 李三 地底に埋れ  
元九謫天涯 元九 天涯に謫せらる  
拳眼青雲遠 眼を<sup>まこ</sup>拳げば青雲遠<sup>とほ</sup>く  
回頭白日斜 頭を<sup>めくら</sup>回せば白日斜なり  
可能勝賈誼 能く賈誼の  
猶自滯長沙 猶お自から長沙に<sup>すた</sup>滯るるに勝るべし

仲間と別れての孤独生活を久しく続け、都より遠隔の地、江州にいる。その間、琴を友とし、酒をつれあいのようにして慰む。みまかる生命に心動かされて流れる川の水を見つめ、別離を悲しみつつ咲きおちる花びらに眼をやる。李仲遠はこの世になく地下の人、元稹はこの空のはてに左遷の身。仰げば青空に浮かぶ雲ははるかに遠く、ふりかえれば、日は西に傾いている。しかし私の身上はここ長沙でいのち果てた漢の賈誼にくらべればなおましである。

この詩篇は元和十一年（八一六）、貶謫された江州で、白居易が四十五歳を数える時の制作である。なお題下の自注にある「李三仲遠」は、李顧言を指すことをすでに花房英樹氏が考証している（『白氏文集の批判的研究』四四二頁）。と

すれば李仲遠の死后一年を経過して、白居易は江州司馬として、また元稹は通州司馬として、それぞれ離散状態同然で不遇な地方官生活であった、春の夕暮時に作られたことになる。

かつて交遊の間がらであつた白居易、元稹、李顧言の三人が、幽明の違いはあつても、現在離散して白居易ただ一人江州の地に都おちした立場をうけとめて、「幽独」の語をあてたのである。その感情は李仲遠の死亡を堺として一層深まったのであろう。しかしかかる境涯にありながら悲傷の極に沈潜することなく、琴と酒とで慰めとした。かうに幽独の環境に布置される琴との関連は、さかのぼって謝靈運の詩を意識して創作に及んだものと認められる。

かように江州司馬をつとめる白居易は、「孟夏、渭村の旧居を思う。舎弟に寄す。——孟夏思渭村旧居寄舎弟」詩の終末に近づき、

閑登郡樓望  
日落江山緑  
帰雁払郷心  
平湖断人目  
殊方我漂泊

閑かに郡樓に登りて望めば  
日落ちて江山緑なり  
帰雁 郷心を払い  
平湖 人目を断つ  
殊方に我は漂泊し

旧里君幽独  
何時同一瓢  
飲水心亦足

旧里に君は幽独す  
何れの時にか一瓢を同じくし  
水を飲み心も亦た足らん

と綴っている。この詩によれば当時兄弟分散して、渭村で孤独同然の生活を余儀なくされている弟の境遇を、「幽独」とみなして表現しているわけである。したがって白居易にとって「幽独」とみなす状況は、自身の場合も相手の場合も差異なく認めていることになる。しかもそれは従来の詩人に見出せない特異な用い方である。

そこで「間居」詩③を注意してみると、

肺病不飲酒  
眼昏不読書  
端然無所作  
身意閑有余  
雞栖籬落晚  
雪映林木疎  
幽独已云極  
何必山中居

肺病みて酒を飲まず  
眼昏くして書を読まず  
端然として作す所無く  
身と意と閑かなること余りあり  
雞は栖む 籬落の晩るに  
雪は映ゆ 林木の疎つに  
幽独已に云に極まれり  
何ぞ必ずしも山中に居せんや

と詠じている。

肺をわずらって酒は飲めず、眼はかすんで読書もかかない。

きちんとおとなしくして、身も心も共にたんまりとゆとりがある。

と閑時を得た事情を率直にいう。この詩篇を作成した頃、白居易は江州司馬のみそらにあった。生来健康に恵まれなかった白居易は、現実となって直面した肉体的障害の為に、一步も外出できない不自由を余儀なくした。到来した何物にも拘束されない時間的ゆとりを、しんみりと味わう機会にあうさいわいを得たのである。詩意の裏面には、恐らく積極的に求めた好ましい時間の余裕にほかならなかったのではないかと読みとれる。

かくて把握した閑時をふまえて、自然の動静に眼を転じた白居易は、

雞は暗くなりそめたのにさそれ生垣をねぐらとし、  
雪はすっかり落葉した林木に白さをうつし出している。  
世俗離れの深い孤独さは、この所で最も達成しつくされておるので、何も山中で暮らすまでもない。

という。ある意味では生きている実感を抱いてきた読書と飲酒とが断たれてしまい、雰囲気的にまったく閑寂となっ

たことが、「幽独」の真意であると感得させたのである。すなわち「幽独」本来のあるべき環境が山中を基盤としなくとも、みごとに実現されたことをのべている。とりわけ日暮れて雪に覆われたごくありふれた自然環境の中、手もちぶさたの時間帯において、極度に幽独を白居易は感じ取ったのであった。

ここに明らかなように、中国の文学、とくに詩の世界に「幽独」の語が出現し、活用されて以来、久しく山中を基盤にし、またそのような環境をふまえてもち続けられてきた観念は、白居易に至ってもはやノーマルでなくなった発見宣告となったのである。同時に白居易はこの詩を、自から間適詩のジャンルに編入せざるをえない処理をした作品的重みがある。

さらにかような発見に類似した経験が白居易に何回あった。例えば元和五年(八一〇)、宮院内に勤務していたある時、

門 敞 九 重 靜	門は敞しくして九重静か
窗 幽 一 室 閑	窗は幽 <small>まど</small> くして一室閑かなり
好 是 修 心 処	好 <small>よ</small> し是れ修心の処
何 必 在 深 山	何ぞ必ずしも深山に在らんや

と「禁中」<sup>④</sup>詩を作っているのがそれである。宮廷内の執務部屋が、深山における修心の状況と匹敵するという。いわば禁中での執務を通して得た感懐が、修心にもってこいであることを披瀝したのである。

また長慶四年(八二四)杭州刺史であった時に、「新たな庭樹を翫で、因りて懷う所を詠ず——翫新庭樹因詠所懷」<sup>⑤</sup>と立題した。

靄靄四月初	靄靄たり四月の初め
新樹葉成陰	新樹 葉は陰 <small>かげ</small> を成す
動搖風景麗	動搖して風景麗わしく
蓋覆庭院深	蓋覆して庭院深し
下有無事人	下に無事の人有り
竟日此幽尋	竟日 <small>ひまもよこ</small> 此に幽尋す
豈唯翫時物	豈に唯だに時物を翫 <small>あそ</small> むのみならん
亦可開煩襟	亦た煩襟を開くに可なり
時与道人語	時に道人と語り
或聽詩客吟	或は詩客の吟ずるを聴く
度春足芳色	春を度って芳色足り
入夜多鳴禽	夜に入りて鳴禽多し

偶得幽閑境	偶たま幽閑の境を得て
遂忘塵俗心	遂に塵俗の心を忘る
始知真隱者	始めて知る 真の隱者は
不必在山林	必ずしも山林に在らざるを

この詩には「幽」の文字を付した語が二つあり、いずれも奥深さを捉えての用い方である。四月の新緑もえる庭園で感得した心情の表明ではあるが、空間的広さがそなわっていることを窺わせる。そして偶然到来した隱遁的境遇に超俗の心境をいだかせた。その瞬間山林の中でこそ実現するものと、従来の隱者に対する既成概念が、必ずしもそれほどばかりでない心理的自覚を白居易はもったのである。これも時間、場所こそ違え、白居易がかねてから蓄えていた既成概念に対する新発見の心境として類似していよう。これまた間適詩に編入されている詩篇で、多少宗教的なものが感懐に作用しているものの如くである。

いずれにしても白居易が得た人生体験は、かれに「幽独」感の新天地をもたらしただけである。この新たな発見はある意味において、かの陶淵明の「飲酒」詩に見える「廬を結びて人境に在り、而かも車馬の喧しき無し」という心境が伏線となつていのように考えられようか。すなわち特

定の場所限定しなくとも、日常的世俗の中で体験しうるものであることを鮮明にした白居易であった。

すでにあげた「間居」詩で、いま一つ側面的な問題として注意さるべきことは、元和十一年二月に白居易は廬山に遊び、陶淵明の旧宅を訪ねている。翌年(八一七)三月二十七日に、周知のように廬山の香爐峯のそばに、草堂を構えての仏教的雰囲気覆われた生活をも実行した頃作成された詩である。したがって「間居」詩を綴る際、「好は修心処」と句づくりする心情をはたかせたところに、草堂生活で味わった仏教が少なくとも影響しているものと思う。つまり「間居」の感を抱いた精神構造の一端に仏教の存在を看過できないと思う。

以上の如く白居易の生涯における元和十二年の段階で、「幽独」の語が表現しうる状況と観念とが、白居易の意識の中で大きな転換をもったことを確かめておかねばならない。

#### 四

白居易は元和十四年(八一九)春に、江州司馬から忠州刺史へ転任を命ぜられ、三月二十八日以降忠州の地に生活を営むこととなった。ある時役所の傍の東楼に登った。「東

楼の竹」詩はその折の作品である。その末の二聯は、

空城 賓客絶えて、  
向夕<sup>ゆうぐれいよ</sup>弥々幽独たり。楼に上つて夜に帰らず。此れ君の我を留めて宿せしむればなり。

空城絶賓客／向夕弥幽独／楼上夜不帰／此君留我宿

と綴っている。ここに時間の推移はあるが、騒音らしきものは一切存在しない。つまり静寂な夜の深まりに伴って、自身の置かれている存在を捉えて、「幽独」と韻律上の配慮を払いながら表現したのである。

同じく「陰雨——うとうしい雨」詩では、

嵐霧今朝重 嵐霧今朝重く

江山此地深 江山 此の地に深し

灘声秋更急 灘声は秋に更に急に

峡気曉多陰 峡気は曉に多く陰る

望闕雲遮眼 闕を望めば雲は眼を遮り

思郷雨滴心 郷を思えば雨は心に滴ぐ

将何慰幽独 何をか将て幽独を慰めん

頼此北窗琴 此の北窗の琴に頼らん

と詠じてみせる。忠州は山峽に囲まれ、湿気の多い立地条件にあったことが認められる。都を望むにも、故郷を偲ぶにも、すべてそのよすがを断たれた陰鬱さに色どられて、降雨の日、家屋内に一人閉じこめられた身上を、白居易は「幽独」と捉えたこと明らかである。その幽独を慰むものに北窓の琴をもつてあてようという。この発想はやはり謝靈運につながる所である。ただ周囲の状況設定に音響や天然現象の動きがある。その中の「幽独」表現であることをおさえておく必要がある。つまり「幽独」を覚えさせるほどの、一切の行動条件から隔絶された状況に置かれた自身の存在と心境とをかく表現したのである。しかもその幽独感を側面から助長したのが陰雨であった。

のち長慶二年(八二二)十月に入って杭州に刺史として赴任した白居易は、「竹閣に宿す」詩を綴っている。

晚坐松簷下  
宵眠竹閣間  
清虛当服藥  
幽独抵帰山  
巧未能勝拙  
忙応不及閑

晩に坐す 松簷の下  
宵に眠る 竹閣の間  
清虚は薬を服するに当り  
幽独は帰山に<sup>あた</sup>抵る  
巧は未だ能く拙なるに勝れず  
忙は応に閑かなるに及ばざるべし

無勞別修道 別に修道に勞すること無し  
即此是玄関 即ち此れは是れ玄関なり

この詩篇を吟味すると、題名に見る竹閣は、或いは杭州孤山に存在する小さな仏閣の名称かと想像できる。その竹閣に宿泊することを前提に、簷下で坐したのは一種の坐禅であつたものの如くである。そして竹閣で就寝に及んだ際、かつて故郷の山のふもとで過した生活状態をふりかえつて「幽独」と感得した。したがって竹閣内の空間に唯一人存在した白居易が、帰山の頃の心境と同じ実態を再体験したわけである。「幽独抵帰山」という表現は、またすでにみた「幽独已云極／何必山中居」という発想につらなる。のちの「無勞別修道／即此是玄関」という表現は、長慶四年(八二四)に作られる「家を移して新宅に入る」詩の第八聯「何必苦修道／此即是無為」へと共通する性質をもっている。そして「玄関」なる語に仏教色彩々々としているのを窺う。かくてこの詩に見える「幽独」には仏教に通ずる内容を孕んでいるとみなしてよいと思う。いわばこの「幽独」こそが玄関に等しいわけである。すなわち「幽独」が自身の拙と閑とを省察させ、それが玄関を痛感せしめるまで導いたのである。したがって一切のものをから隔絶された



孤独状態を「幽独」と律するばかりでなく、仏教的内省を確認する機会をもつことを抱撰するわけである。まこと「幽独」に仏教の裏付けがはたらく新たな局面を白居易は表明するのである。

長慶四年五月、白居易は太子左庶子分司東都として、杭州から洛陽の履道里に居をかまえた。ある時病身でありながら散策をした。そして「林下を閑かに歩く。皇甫庶子に寄す」詩<sup>①</sup>ができた。皇甫庶子とは皇甫鏞が太子右庶子の官にあったからかくいうのである。早朝に静寂の中を散策してのち、

一酌池上酒　一たび酌む　池上の酒  
数声竹間吟　数声あり　竹間の吟  
寄言東曹長　言を寄す東曹の長  
当知幽独心　当に幽独の心を知るべし

と綴り終っている。まったく一人芝居に似た散策であった。その折の閑時を利用して飲酒と吟詩とを自由恣意に行った。かような行為をすべて包括して「幽独」と表現したことは明らかである。何の行動をも出来ない孤独さではない。そこはかとなく楽しみが漂っている「幽独」なのである。そ

してこの心境を皇甫鏞に自負しているように読みとれる。これも謝靈運の「幽独」感に通ずる作用を認められる。

「洛下の寓居」詩<sup>①</sup>も長慶四年の作品である。

秋館清涼日　秋館　清涼の日  
書因解悶看　書は悶を解するに因りて看む  
夜窗幽独処　夜窗　幽独の処  
琴不為人彈　琴は人の為に弾かず

と最初の二聯を綴っているが、ここに見える「幽独」は夜が成立の条件となっていて、その所にこそ一層実感を強めたにちがいない。しかしその「幽独」に配するものとして琴が措字されているのは、明らかに謝靈運の詩を意識していることである。またこの詩に関する限り「幽独」を表現しているわりに、切実な孤立さを余り感じさせないのはどうしたことであろうか。

宝曆元年(八二五)五十四歳の白居易は、五月に蘇州刺史に除せられて着任した。病氣休暇をとって、郡中の北亭で横たわる静養時間を得た。「北亭に臥す」詩<sup>①</sup>はその際に綴られたものである。その詩中に、

唯此閑寂境

唯だ此れ閑寂の境のみ

愜我幽独情

我に幽独の情を愜ましむ

病仮十五日

病仮十五日

十日臥茲亭

十日は茲の亭に臥す

という二聯に見える「幽独」は、直接には閑寂の境なのであり、間接には静養の時間を得たことなのであって、この両者の暗合のうちに成りたっている。そのうえ公務から解放された静養生活に、いわば雑務のしがらみに煩わされることなく伏臥することから得た精神的ゆとりを、「幽独」の情と表明せざるを得なかったものと思う。

「東亭に宿り、曉に興く」詩も、蘇州刺史の時に作られた。その尾聯で、「何ぞ言わん万戸の州、太守常に幽独なり」と。何言万戸州／太守常幽独<sup>カ</sup>と結んでいる。『旧唐書』地理志によると、蘇州は戸数七六四二一、人口六三二二六五五であったという。白居易のこの表現には、恐らく蘇州刺史こそ「幽独」にふさわしい相場の職務と聞かされていたのであろう。それが今刺史を体験してみても、白居易は意外に思ったのであった。その驚きを「何ぞ言わん万戸の州、太守常に幽独なり」と表明したのであったと思う。いわば容易に閑寂を見出せない状態にあったにちがいない。こ

の詩篇は長篇で、その中に「独り一張の琴を抱く」という句があって、それが「太守常に幽独なり」という表現を引出している構成上の技巧をあらわしている。これまた謝靈運の詩が意識されていることにちがいない。しかしこの場面での「幽独」を慰むには、琴は何の役にもたななかったという、従来の方向と異った表現法をとっている。

かくて太和四年（八三〇）、かつて六年前に約半年余の居住をなした洛陽の履道里にて、再び生活を営むこととなった。太子賓客分司をつとめる為である。その折に作られた一つの詩篇にも「幽独」の語を組入れている。その詩は「崔十八が予の新昌の弊宅に宿るを聞く。時に予も亦た崔家の依仁の新亭に宿る。一宵偶たま同じくし、<sup>ふたり</sup>両の興み暗合す。因りて詠を成し、聊か以て懷を写す」と題を立てている。崔十八とは崔玄亮のことであり、唐代望族の出自をもつ。時に太常少卿として長安に居住したが、前年二人は洛陽で互いに往来し、詩の贈答をかわす親交の間がらにあった。かつて白居易が長安にいた頃、新昌坊に居をかまえていたことがある。それを「新昌の弊宅」と表現した。崔玄亮所有の洛陽存在頃の依仁坊宅を「依仁の新亭」と表示した。この詩を構想した時、二人は東西の都にそれぞれ別居していたのである。詩中で、

君向我齋眠

君は我が齋に向いて眠り

我在君亭宿

我は君が亭に在りて宿る

平生有微尚

平生微かなる尚有るも

彼此多幽独

彼此幽独多し

何必本主人

何ぞ必ずしも本の主人ならんや

両心聊自足

両りの心は聊か自から足れり

を以てこの詩を終わっている。お互いの過去における生活状況が、多分に「幽独」であつたと白居易は認識している。それを一種の興趣として明るく捉えているようである。そして夜を背景にした静寂さの中で実現できると白居易は考へている。かれの生活上の環境や精神に漸やくほとんど幽独を覚える状況に傾いたようになったことをものがたっている。

開成四年(八三九)六十八歳を迎えた春に、「春日閑居」三首が綴られた。時に太子少傅分司として洛陽で生活を過していた。その第一首は、

陶云愛吾廬

陶は云う吾が廬を愛すと

吾亦愛吾屋

吾も亦た吾が屋を愛す

屋中有琴書

屋の中に琴と書と有り

聊以慰幽独

聊か以て幽独を慰む

是時三月半

是れ時は三月半ば

花落庭蕪綠

花は落ち庭蕪は緑なり

舍上晨鳩鳴

舍上に晨の鳩は鳴き

窓間春睡足

窓間に春の睡は足る

睡足起閑坐

睡足りて起きて閑かに坐り

景晏方櫛沐

景の晏くして方めて櫛沐す

今日非十齋

今日は十齋に非ざれば

庖童饋魚肉

庖童は魚肉を饋る

飢來恣飡歎

飢來れば飡歎を恣まにし

冷熱隨所欲

冷と熱と欲する所に隨う

飽竟快搔爬

飽竟れば搔爬を快しとし

筋骸無檢束

筋と骸と檢束する無し

豈徒暢支体

豈に徒らに支体を暢ばすのみならん

兼欲遺耳目

兼ねて耳目を遺れんと欲す

便可傲松喬

便ち松喬に傲る可し

何仮盃中潦

何ぞ盃中の潦を仮らんや

と詠じている。この詩篇に関しては高木正一氏が、すでに周到な注釈を与えていて参考になる(岩波本『中国詩人選集』)

白居易下。「屋中有琴書／聊以慰幽独」の構想は、幾度も指摘してきた如く、謝靈運の詩作を沿襲していること明白である。そして全篇に晩春の陽気に調和するような、解放感が漂う屋内生活を描写していて明い。そこには何らの悲哀も感じさせないで、のびのびとした閑居の喜びをさえ窺うのである。もはやかような閑居生活が白居易の「幽独」感を陰湿な方向へとめりこまざなかつたのである。まさしく環境上にも精神上にもそうであつた。

## 五

開成五年（八四〇）、六十九の年齒を数える白居易は、太子少傅分司として洛陽に過し、晩春には風疾がやや回復の徴候にある体調であつた。そのような状況のもとで一篇の詩に、「老い病みて幽独す。偶たま懷う所を吟ず。」（『白氏文集』卷六八）という題をたてた。詩はまず、

眼漸昏昏耳漸聾

眼は漸く昏昏にして耳は漸く聾

満頭霜雪半身風

満頭霜雪にして半身風なり

と肉体の衰弱をこの一聯に表明している。視力は弱り、聴力も衰え、白髪に覆われた頭、中風から来る半身不随というふうな点の連なりで、体力の減退ぶりを少しく悲観的に表現している。甚だ具象的な健康上の変調ぶりである。つ

づいて、

已將心出浮雲外<sup>⑮</sup>

已に心を將つて浮雲の外に出だす

猶寄形於逆旅中

猶お形を逆旅の中に寄す

との一聯を綴る。外形の変調と衰退とをたどりながらの自身の心中を披瀝する。この詩篇が完成した前年に、白居易は「病中詩十五首」（『白氏文集』卷六八）をすでに作りあげ、序文を添えている。その中に、

開成己未歲、余が蒲柳の年、六十有八、冬十月甲寅の旦、始めて風痺の疾を得、体は癢み目は眩み、左足は支かず。蓋し老病相乘り、時有りて至るのみ。余は早く心を釈梵に棲め、跡を老莊に浪まます。疾に因りて身を覲じ、果たして得る所有り。何となれば、形骸を外にして内に憂患を忘れ、禪觀を先にして後に医治に順う。

と告白するように、病身をかかえた白居易が仏教を精神生活の支えとし、禪觀を行ずる心境に住したのである。かような心境の延長上に「已に心を將つて浮雲の外に出だすも、猶お形を逆旅の中に寄す」の一聯が思想的にできてい

るといえよう。白居易において精神はもはや肉体を離れて、次元を異にする仏教の世界に遊行している境地にあった。

觴詠罷来賓閣閑

觴詠罷めて来た賓閣閑じ

笙歌散後妓房空

笙歌散じて後妓房空し

風痺にかかった白居易は、やなく飲酒と詩作とをひかえてから、訪問客は誰一人とてなく、客間はしめきりとなり、吹奏や歌唱をしなくなつてのち、妓女だまりに人影がまったく見られなくなつた。つまり白居易は自発的に孤独の人となつたのである。それも極めて閑寂な境遇の中において迎えたのであつた。

世縁俗念消除尽

世縁と俗念と消除し尽す

別是人間清浄翁

別は是れ人間の清浄翁

かくてこの世のしがらみと、浮き世の雑念とがすべて無くなつてしまつた白居易には、一方で世縁と俗念とに具現される煩悩を消除した老いばれのこの世の清浄人である、という自覚をいだかせたのである。つまり仏同然の生きているこの世の翁であるという感懐に至つたのである。これまた白居易が培つた仏教精神から来る一種の達観の境地が発露されたものである。

老と病とに見舞われた白居易であっても、従前から心がけて養つてきた仏教精神によって、老病を克服できる胸中

のゆとりと調和とをもつて、この詩篇が律詩形式をとつてなりたっている。しかし現実には老病がもたらした健康上の衰弱と缺陷とが、かつて親しみ楽しんだくさぐさを放擲せざるを得ない孤独状況に、白居易をおいやつたのであつた。そのような状況の中で白居易は沈吟憂悩することなく、かつて平生の精神生活に組入れてきた仏教の融和作用によって自己の現実を熟視して、抒情を主流においた詩篇に、「老い病みて幽独す。偶たま懐う所を吟ず」と立題したわけである。かような視点でいうならば、詩題の「幽独」は「人間の清浄翁」そのもののありようであるといえよう。そしてそれはや暗いイメージを帯びることばとしてでなく、ほのぼのとした明るさを感じさせる孤独な立場をいうことばへと昇華していると考えるのである。まことに平靜な間適の心情を孕む「幽独」の詩情であるといえる。七十五歳で終焉する白居易晩年の「幽独」感の主張であることを注意したい。

## 六

以上みてきた如く、白居易が「幽独」を用いて訴えた孤独の詩情は、山中深林に於て不足不満のうちに沈溺していた類のものではなくて、市井における間適調和の渦中か

ら発露した孤独の詩情である。それにはかれが早くから参入していた仏教から吸収した精神生活が多く影響しているからにほかならない。<sup>18</sup>この点で他の詩人がほとんど自身の欲望を叶えられない内容に重きをおいて、「幽独」を用いて孤独の詩情を訴えているのとは、自ずから趣を異にしている。

人間たるもの老大すれば、比例して孤独を深め、感慨も切実さを増していくことは、自明の道理であるのを否定できない。白居易は老大の推移の過程で、つねに仏教を精神界に活用していった。清の衰枚をして「白傳佞仏」(『小倉山房文集』卷二〇)と発言せしめるほどの崇敬ぶりであった。「幽独」の語の出自は、ほんらい自身の意欲が阻害を蒙って伸張しない詩情をそなえたところにあったが、白居易に至っては、世俗の渦中で仏教精神に支えられて、孤独の実情を凝視しつつ平静に処理して、調和を保つ享楽の心情へと転化させた。その詩情をば「幽独」を用いて詩篇上にいきいきと顕現せしめたのである。

かような白居易独自の孤独感をば詩語に「幽独」をすえ、構成上では謝靈運の詩を沿襲し、詩想を展開するのに陶淵明を意識して、仏教を加味して清閑な詩情の世界としたのである。

## 註

- ① 『白氏長慶集』卷三、なお卷二には「李三を哭す」詩が見える。
- ② 『白氏長慶集』卷二、『白氏文集』卷一〇。
- ③ 『白氏文集』卷七。
- ④ 『白氏文集』卷五。
- ⑤ 『白氏文集』卷八。
- ⑥ 『白氏文集』卷一一。
- ⑦ 『白氏文集』卷一八。
- ⑧ 『白氏文集』卷二〇。
- ⑨ 『白氏文集』卷八。
- ⑩ 『白氏文集』卷八。
- ⑪ 『白氏文集』卷五三。
- ⑫ 『白氏文集』卷五一。
- ⑬ 『白氏文集』卷五一。
- ⑭ 『白氏文集』卷五二。
- ⑮ 『白氏文集』卷六九。
- ⑯ 『維摩經』方便品の「是身如浮雲、須臾變滅」を意識しているよう。
- ⑰ 今井清「白楽天の健康状態」(『東方学報』京都第三十六冊) 参照。
- ⑱ 拙稿「白居易の文学と仏教」(『大谷大学研究年報』第十六集) 参照。